



## 新入生の皆さんへ

医学部長 本 間 研 一



新入生の皆さん、北海道大学医学部入学おめでとうございます。医学部教職員一同を代表してお祝いを申し上げますとともに、皆さんを心から歓迎します。

北海道大学医学部は、1918年、北海道帝国大学発足のとき、農学部とともに設置された北大では最も古い学部の一つです。現在、医学部には2つの学科がありますが、医学科は学部創立当初からの学科であり、それに対し保健学科は4年前に設置された北大では最も新しい学科です。皆さんはそれぞれ、第90期生、第5期生として、これから本学で勉学に励むことになります。

21世紀になって、医学部における教育が大きく変わりつつあります。北大医学部は、今から8年前に大学院を重点化し、高等教育の軸足を学部教育から大学院教育に移しました。北大医学部卒業生の多くは大学院に進学します。医師や医療技術師としての知識や技術をさらに高めるだけでなく、深い洞察力和探究心を養い、世界の第一線で活躍する専門的な職業人として、また医学の発展に寄与する研究者、教育者としての素養を身に付けていただきます。皆さんの行く先々には、皆さんの高度な知識と技術、卓越した能力と人間性を必要としている多くの人々がいます。

大学院を卒業して、大学における高等教育はすべて修了しますが、医学医療は日進月歩であり、皆さんは医学知識や技術をリニューアルするため、生涯かけて研鑽に励まなければなりません。したがって、これから重要になるのは、何時においても自ら学ぶ姿勢と考える習慣で、その基本は大学に入って直ちに身に付けなければなりません。皆さんがこれから経験する様々な問題には、おそらく正解はなく、与えられた条件から最善の答えを出すことが求められます。

大学における修業期間は、人間としての素養が磨かれる人生でも最も重要な時期であり、また皆さんの一生を左右するかもしれない人物や思想に巡り会うことができ

る時期であります。皆さんは、確かに知力においては優れているかも知れませんが、高度専門職業人や研究者として成功するには知力だけでは十分ではありません。私たちに求められているのは、他者との交わりのなかで、自らを相対化する能力です。自己を相対化し、客観的に評価できなければ、どんなにすばらしい知識や技術を持っていたとしても、独善という落とし穴に落ちてしまいます。

その意味で、最初の一年半の全学教育、教養教育は重要です。医学部に入ったので、一刻も早く専門教育を受けたいという気持ちは理解できますが、この時期は、むしろ医学以外の学問に目を向けて欲しい。そして、世の中には皆さんが経験したことのない文化や歴史があることを、その中で人や社会がどのように思考し、行動してきたかを認識し、体験して欲しいと思います。

ところで、ノブリス・オブリージェ、日本語で「崇高な精神的義務」という言葉があります。選ばれたものが就く聖なる職業にともなう精神的義務という意味であります。みなさんは選ばれて医学部に入学し、そして医師、医療技術師、医学研究者になります。国民が莫大な税金を納めて国立大学に医療従事者の養成を委託しているのは、国民の誰もが健康な生活を願っているからです。医師や看護師、医療技術師は、極めて高度な専門職業人ですが、患者が期待しているのは専門的技術だけでなく、競争社会では失われつつある人間としての温かみや、思いやりの心です。皆さんには、この大学生活の中で、医療従事者のノブリス・オブリージェとは何かを考えていただきたい。

現代社会は複雑で、未来を予測することは困難です。しかし、医学や医療に対して強く動機付けされている皆さんは、自然豊かな北大のキャンパスで、思う存分勉学に励んでいただきたい。またその間、友人や先輩、教員との交わりを通じて、人格を陶冶し、人類の行く末をみる見識と、自分が社会的存在であることの自覚を、養っていただきたい。健康には十分に留意して、全員がそろって医学部を卒業することを祈念します。

## 保健学科新入生の皆さんへ

保健学科長 小林 清 一



新入生の皆さん、北海道大学医学部保健学科へのご入学誠におめでとうございます。教職員一同、心より皆さんを歓迎致します。今年度は看護学専攻75名、放射線技術科学専攻41名、検査技術科学専攻41名、理学療法学専攻20名、作業療法学専攻19名の総勢196名の新入生の皆さんをお迎えできたことに大変嬉しく思います。皆さんは保健学科へ胸を躍らせて入学されたかと思いますが、それ以上に私達教職員も本年度はどのような学生さんが保健学科に入学したのだろうと大きな期待をふくらませております。

振り返りますと、平成16年4月に保健学科第1期生を迎え入れて丁度4年間のサイクルが経過し、初めて保健学系の学士卒業生を社会及び大学院へ送り出しました。皆さんは、第5期生として次の新しいサイクルの先陣を切ったわけです。なぜ新しいサイクルかと申しますと、これまでの4年間はカリキュラムにおいて科目名や授業時間数の変更をはじめ、科目再編成などの大幅な変更は認められておりませんでした。1サイクルを経験して、必要に応じたカリキュラムの修正が可能となり、各専攻において平成20年度入学生から初めて改正カリキュラムを適用したためです。しかし、カリキュラムの一部改正を行っても、保健学科の教育目標には些かな変更もありません。より適切で効率的な新しい学部専門教育に大いに期待していただきたいと思います。

振り返りますと、平成16年4月に保健学科第1期生を迎え入れて丁度4年間のサイクルが経過し、初めて保健学系の学士卒業生を社会及び大学院へ送り出しました。皆さんは、第5期生として次の新しいサイクルの先陣を切ったわけです。なぜ新しいサイクルかと申しますと、これまでの4年間はカリキュラムにおいて科目名や授業時間数の変更をはじめ、科目再編成などの大幅な変更は認められておりませんでした。1サイクルを経験して、必要に応じたカリキュラムの修正が可能となり、各専攻において平成20年度入学生から初めて改正カリキュラムを適用したためです。しかし、カリキュラムの一部改正を行っても、保健学科の教育目標には些かな変更もありません。より適切で効率的な新しい学部専門教育に大いに期待していただきたいと思います。

さて皆さんを含め、保健学科の在籍者数は836名となり、一学科の学生数としては北海道大学でも有数の大所帯となりました。その最も大きな理由は、北海道大学医学部が養成する職種の数であります。現在、国立大学法人では10種類の医療専門職者を養成していますが、そのうち、歯科医師と薬剤師を除く8種類、すなわち医学科では医師、保健学科では看護師、保健師、助産師、診療放射線技師、臨床検査技師、理学療法士、作業療法士を養成しています。これら8種類すべての医療専門職者を養成している国立大学医学部は、北海道大学を含め4大学のみです。このことは、皆さんが卒業後に医療専門職者として医療施設等で活躍する上で非常に大きなメリットとなります。現在の医療は、移植医療や再生医療、遺伝子治療といった高度先進化・専門化が急速に進行すると共に、一方では救急医療や地域医療、医療過誤等の根源的な医療問題が社会的に大きくクローズアップされて

います。これらの諸問題に共通するのは、個々の医療専門職者がそれぞれの専門性を追求するだけでなく、他の医療職における専門性をも十分に理解し、お互いが有機的に連携するというチーム医療こそが、医療現場においてもまた社会的にもますます要求されているということです。このように主要な医療専門職種のすべてをカバーする北海道大学医学部は、皆さんが将来、チーム医療を担う一員としてそれぞれの専門性を発揮するための最適な教育環境であるといえます。

医学部保健学科はまだ4年余りを経過したばかりですが、北海道大学における保健学系教育組織のルーツは、医学部が創設された翌年の大正9年（1920年）に設置された北海道帝国大学看護法講習科にまで遡ることができます。翌年、医学部附属医院に移管された看護法講習科はその後、厚生女学部、看護学校へと改称されるに伴い2年制から3年制となり、また、併存していた医学部附属各種技師学校も3年制へと移行したことから、これらの医療専門職養成組織を統合した北海道大学医療技術短期大学部が昭和55年（1980年）10月に設置されました。以後、昨年3月に閉校となるまでの26年間に、他の国立大学医療技術短期大学部は次々と4年制医学部保健学科への改組を果たし、一部ではすでに大学院教育もスタートしていました。北海道大学では平成16年4月の国立大学法人化と同時にようやく医学部保健学科に第1期生を迎え入れ、本年度の第5期生入学に至ったわけです。このように保健学科は実に88年にも及ぶ北海道大学保健学系教育の長い歴史と伝統を継承していることを十分に認識していただきたいと思います。さらにこの4月からは、北海道大学における第17番目の大学院組織として、医学部保健学科を基盤とする大学院保健科学院・大学院保健科学研究所が誕生しました。保健科学院は大学院生の所属組織であり、保健科学研究所は主に医学部保健学科の学部教育と保健科学院の大学院教育に携わる教員の所属組織です。すなわち、医学部を共有して2つの独立した大学院組織、医学研究科と保健科学院・保健科学研究所とが並立することになりました。保健科学院修士課程（2年制）は、高度先進医療に対応できる幅広い知識と高度な医療技術を修得した高度医療専門職者、保健科学及び看護学分野における実践的指導者、国民の健康保持・増進を科学的にコーディネートできる保健スタッフ、次世代の保健科学・健康科学を担う教育者及び研究者などの人材育成を教育目標としております。より多くの方が大学院へ進学したいと思えるような魅力的な学部教育及び大学院教育を実践しておりますので、是非皆さん

人も自分の能力を信じて無限の可能性へのチャレンジ精神・フロンティア精神を大いに発揮していただきたいと思います。

現在、医学部では2009年の医学部創立90周年に向けて、種々の記念事業を計画し実施しております。その柱として建設を予定している医学部会館は、高度先進化する医学・医療の活動拠点・発信拠点となるべきもので、医学生・保健学生への教育支援はもとより、若手教育者・研究者の育成、医学研究成果の社会還元と情報発信、社会的ニーズに対応した卒後教育支援、医学医療分

野での国際交流事業の推進など多くの活動に利用されます。医学部90年の歩みは医学・保健学教育研究の歩みでもあります。北海道大学医学部が世界に名立たる教育研究機関としての存在感を示し、今後さらに発展し続けるためにも、また、在学生・卒業生が将来に亘り出身学部に対する信頼と誇りを保持し続けるために、本記念事業を成功裡に導かねばなりません。新入生の御父母の皆様にも是非、本記念事業の趣旨をご理解いただき、格別なご支援を賜りますようお願い申し上げます。

## 退職のご挨拶

眼科学分野 教授 大野 重 昭



このたび、私は医学研究科感覚器病学講座眼科学分野教授を定年退職することになりました。在職中は北海道大学大学院医学研究科、医学部の皆様方を始め、北海道大学病院の皆様方、そして多くの諸先生、事務の皆様大変お世話になりました。ここに改めまして深甚なる

感謝の意を表するものでございます。

私が北海道大学を卒業する前後は、大学紛争という大きな嵐が全国に吹き荒れておりました。このため、昭和45年3月には北海道大学では卒業式も行われず、私ども46期生は各自がばらばらに医学部に出向き、事務の窓口からボンと卒業証書を渡されるという、なんとも味気ない卒業風景でした。当時の医学部卒業生は非常にメジャー科への志向が強く、私の同期生もほとんどが内科、外科、小児科、整形外科などを志望しておりました。その分、眼科を含めいわゆるクラインな科にはほとんど希望者がおりませんでした。私は卒業後の各科ローテート時に、繊細な眼科手術を直接目の当たりにして、その奥深さに強く心を打たれ、眼科杉浦清治教授の眼科教室に入局させていただきました。学生時代には、自分が眼科医として生涯をすごすことになるとは思っていませんでした。また、46期生では私がただ一人の眼科医となった訳であります。

眼科に入局後は杉浦清治教授、青木功喜医局長から（１）臨床的に高頻度なよく遭遇する疾患と、（２）比較的稀な疾患をそれぞれ１つずつ得意分野とし、２つの専門領域を持つようにご指導をいただきました。これがきっかけとなって、私は非常に頻度の高い角結膜疾患、外眼部疾患と、比較的症例数の少ないぶどう膜炎、内眼炎に取り組むことになりました。しかも、両先生のご推薦で昭和49年9月から昭和51年8月までの2年間、留学させていただいたカリフォルニア大学サンフランシスコ校眼科学教室は、この両方の分野での世界的権威がたくさんおられ、益々自分の興味を伸ばすことができたのは幸いでした。

カリフォルニア大学サンフランシスコ校に留学中、私は動物実験に加えてヒトのサンプルを用いた眼科臨床免疫学研究にも従事することになりました。しかし、私はアメリカでの医師免許を持たないため、患者さんから検体を採取する時には必ず誰かに依頼する必要があり、とても非能率的でした。このため、自分でも診察や採血が

自由にできるようにと一念発起し、ECFMG（Educational Commission for Foreign Medical Graduates）受験を志しました。毎日、日中の眼科での実験、研究を終えると、夜は図書館で内科や外科、産婦人科、小児科など、学生時代の勉強の総復習です。北大医学部を卒業後既に4年を経過しており、改めての受験勉強、しかも英語の教科書による復習はつらいものがありました。しかし、数ヶ月後には無事に筆記試験、そして英語口頭試問をパスし、臨床現場での診療、検体採取も自分の思うように自由にできるようになりました。毎週ぶどう膜炎外来、角膜外来、その他の特殊外来診療に従事するとともに、手術室にもたびたび入って直接アメリカの臨床眼科学を学ぶことができたのは、私にとっては本当に有意義な体験となりました。

帰国後、私は杉浦清治教授をリーダーとして、当時の北大眼科学教室が全力を注いでいたバーチェット病やVogt-小柳-原田病などのぶどう膜炎の臨床および基礎研究に従事しました。特に当時の第一病理学講座の板倉克明助教授、相沢幹教授をはじめ、免疫遺伝学グループの皆様には本当に色々なご指導をいただき、世界最先端の共同研究をさせていただきました。また、結核研究所の森川和雄教授、そのあとの小野江和則教授（同期生）のラボにも大変お世話になり、現在でも実験のご指導を仰いでおります。この間、バーチェット病の世界疫学分布調査のために、和田武雄札幌医科大学学長にお願いしてジェッダ（サウジアラビア）のキングアブドゥルアジズ医科大学客員教授にご推薦いただき、現地での診療や学生教育に従事した時期もありました。また、文部省在外研究員としてカリフォルニア大学サンフランシスコ校プロクター眼研究所に2回目のアメリカ留学をさせていただき、大変充実した毎日を過ごさせていただきました。

平成元年9月には横浜市立大学医学部眼科教授に任命され、当地に赴きました。横浜には知人もおらず、一抹の不安がありましたが、港町の横浜は私の生まれ故郷である函館と似て妙に懐かしい、そしてエキゾチックな文化の香りが漂う町でした。とても住みやすく、私はたちまち横浜の大ファンになりました。横浜市立大学はこじんまりとした公立大学であり、学生は非常に優秀で『世界に開かれた町、横浜』のスローガン通り、大学内でも常に世界に目を向けて切磋琢磨する雰囲気がいっぱい根付いておりました。私は北海道大学時代の研究テーマをそのまま引き継がせていただき、眼科学教室内のやる気を十分に引き出せるよう、自由闊達な教室作りに専念いたしました。その甲斐があつて、教室の業績は臨床面でも



研究面でも期待以上の成果をあげることができたと自負しております。また、私自身もライフワークの一つであるぶどう膜炎の世界疫学調査を継続し、毎月一回は海外出張を繰り返しながら、世界を飛び回りました。海外での現地診療、疫学調査時に入手した患者さんのDNAサンプルや臨床検体は、今でも有効に活用させていただいております。私が横浜市立大学眼科学教室在任中のスタッフから、すでに3名の眼科教授が輩出したことも大変うれしいことです。

ただ一つ残念な出来事は、平成11年1月11日という新年が明けて間もない日に、横浜市立大学病院手術室で外科手術の患者取り違い事件が起きてしまったことです。その頃、私は手術部長を兼任しており、当時の病院長、医学部長とともに大きな責任を問われました。患者取り違いを未然に防ぐ4重、5重の関門があったはずなのに、これらをすべてくぐり抜け、心臓手術を受けるはずの患者と、肺の手術患者がどうして取り違いられたのか、病院側の管理責任は多大なものがありました。その後しばらくは病院の安全管理体制の再構築に全病院を挙げて大きなエネルギーを注いだことはいまでもありません。この不幸な事件を通して、医療安全管理学という新しい学問領域の重要性を再認識した次第でございます。

平成12年には再び札幌に戻る機会を与えていただきました。当初は「北海道大学大学院医学研究科病態制御学専攻感覚器病学講座視覚器病学分野」という、寿限無のような長い名前を覚えるのに苦労いたしました。しかし、大学院大学となった北大眼科を再構築すべく、元氣一杯な教室員、新進気鋭の医局員、大学院生とともに、研究・教育体制の充実を図りました。そのお蔭で研究業績は年々著明に上昇し、大学院の飛び級による短期修了

者も2名輩出いたしました。また、世界一流雑誌への投稿、掲載論文数は年々増加し、2007年には1年間に40を超える英文論文がアクセプト・掲載されました。これらは医学部学生教育への尽力に加え、修士・博士大学院学生教育にも力を注いだ成果と自負しております。

また、臨床面では特殊専門外来を従来の3つから9つに増やして北大病院での診療内容の充実を図りました。この間、眼科の手術件数は1990年代の年間400件に比べると倍増し、2007年度にはついに1,000件を超え、北大病院一の年間手術件数をこなしております。一方、眼科以外の仕事では総長補佐や病院の手術部長、および2期にわたる副病院長を拝命いたしました。特に副病院長時代には医療安全管理部長を兼任させていただき、病院内の医療安全管理体制の確立、医療安全思想の普及に微力を尽くさせていただきました。そのお蔭で、最近では国立大学病院相互チェックでも北大病院の医療安全システムはよく整っていると褒めの言葉をいただけるようになり、大変うれしい限りでございます。

学生時代には自分が生涯大学に残り、教育や研究、そして大学病院での診療に従事するとは思っておりませんでした。それぞれの時代に与えられた環境の中で、有能な仲間と自分の計画通りに大変楽しく仕事ができ、それを世界に向けて発信できたことに、改めて深く感謝いたしております。

幸い、多くの皆様のご尽力を賜り、私は2008年4月から新たにスタートする寄附講座『北海道大学大学院医学研究科研究眼科学講座』の特任教授として、今後も炎症眼科学の研究、臨床をさらに継続、発展させていく所存でございますので、今後ともくれぐれもどうぞよろしくご指導、ご助力、ご助言を賜りますよう、衷心よりお願い申し上げます。

## 定年退職にあたって

医療情報学分野 教授 櫻 井 恒太郎



北大医学部へは12年前に附属病院医療情報部の初代専任教授として迎えていただき、その後、大学院重点化に伴って社会医学専攻の分野へと所属は変わりましたが、医療情報部の部長室で病院のコンピュータシステムの稼動状況を肌で感じながら過ごしてきました。

30年前に会計計算を目的として導入された計算機は今

では病院のすべての機能を支える巨大なシステムに発達し、効率的かつ安全な運用のためには管理者にも不断の勉強と経験の蓄積が不可欠となっています。システムがダウンしたときの医療情報部はさながら患者が殺到する救急外来の雰囲気となり、何から処理をすべきか分秒を争って「情報処理のトリアージ」の判断と指揮が必要となるわけです。この業務は医療情報学のいわば「臨床診療」に含まれると言えます。

大学院重点化に伴って医療情報学は社会医学の一分野となりましたが専任教員は私だけでしたので、常に医療

情報部と合同で様々な研究と教育を行ってきました。幸い優れた大学院生が次々と入学してくれたこともあって、日本医療情報学会の年次大会での活動も他の大学とトップを争うまでになりました。学内においても「フィールドオートメーション」(農、工、水産)、「ガバナンスの変容」(法、経) など他部局の共同研究への参加の機会をいただき、総合大学としての幅と奥行きを実感した次第です。教育面でも生命倫理、情報教育、医倫理と医事法、一般教育演習など、学際領域の経験を重ねることができました。

医療情報学は臨床でもあり、基礎(工学)でもあり、社会医学でもあり、という幅のひろい学際領域の学問です。情報処理のスキルは診療、研究においてすべての医療従事者が身につけるべき技能としてますます重要に

なっています。EBMの基礎となる臨床疫学や判断分析、批判的吟味は国家試験にも必ず取り上げられるようになりました。また、社会的にはEHR(Electronic Health Record)と呼ばれる生涯の電子カルテともいべきデータベースをどのように作って行くかが今後の重要な課題となり、これに対して大学人として社会医学の観点から提言をすることが必要となります。

ひとつ心配なことは、医学研究科の人員削減の影響を受けて退職教授の補充が持ち回り状態となっているため、私の後任がすぐには決まらないことです。医療情報学を社会医学に位置づけた北大医学部の先輩の先見の明を生かすために、この分野の教育・研究の維持と早期の選考をお願いする次第です。

## 定年退職にあたって

保健学科看護学専攻 教授 岩 田 銀 子



北海道大学とのご縁は昭和41年北海道大学付属看護学校および昭和42年同付属助産婦学校の学生として学んだ学生時代から始まる。卒業後は北海道大学病院での3年間の臨床、その後は北大とは全く無縁であったが、平成11年、29年ぶりに北海道大学医療技術短期大学部の教員として赴任し、9年間助産師教育に携わってきたがアツという間であったという気がする。この間、後ろを振り返る暇もなく、ひたすら走り続けた感がある。

助産師教育は、現在、いろいろな課題を抱えている。どのような形態の教育制度が望ましいのかを検証していくのもその一つであろう。北海道大学における助産師教

育の歴史を絶やすことなく、よりよい助産師の育成がなされることを願うものである。

この1か月、退職にあたり研究室の整理、引っ越し、送別会の出席等々、雑務に追われた日々であったが、思い起こすと、少なからずいろいろな思いが去来する。「自分にも定年が来るということが信じられなかった」10年前、「定年まで働くことの意味が何となく分かるような気がした」3年前、今、定年を迎えるにあたり、教育も研究も未だ途上といった感が免れないが、まずは、「これで良し」として着地しようと思っている。この間、ご交誼をいただいた多くの方々のご支援・ご協力に感謝したい。次は、第2の人生に向けて出発し、やり残したこと、新しいことあるいは楽しいことを沢山みつけて、過ごしていきたいと思っている。

北海道大学の一層の発展をお祈りいたします。

## 退職によせて

保健学科作業療法学専攻 教授 大宮司 信



昭和39年3月の肌寒いある日、旅行鞆ひとつを持って私は札幌駅に降り立ちました。青函連絡船に乗り、東京から夜を越して辿りついた札幌にはまだ沢山の雪が残っていました。

それ以来約40年、人生の三分の二を北海道大学で過ごさせて頂きました。学生時代に通った教室は取り壊されて、その後に私が勤めることになった保健学科の校舎が建てられました。2本の大きなプラタナスの木が変わらずに玄関前に立っています。医局や病院に通うたびに見上げた銀杏並木は、いつも気持ちを新たにしてくれました。

医学部を卒業する頃には尊敬していた諏訪望教授が主宰される精神医学教室に入れて頂こうと心に決めていました。教室では精神医学の基本を教えて頂き、また医療者としての心構えの初歩もたたき込まれました。その後網走の道立向陽ヶ丘病院精神科に2年、旭川市立病院精神科に1年働かせて頂きました。

臨床の精神科医としての修練をうけているうちに、「精神病は脳の中のどのような機序によって起こるのだろうか」に興味がおき、再度北大に帰らせて頂き、脳内のノルアドレナリン合成酵素の研究につかせて頂きました。

助手としてしばらく働かせて頂いた後、この研究の成果がきっかけとなり、米国シカゴ大学医学部精神医学教室のメルツァー教授のもとに留学でき、2年間准教授として働かせて頂きました。ここでは研究を更に進めて、 $\alpha$ -2型アドレナリン性受容体の研究に取り組みました。特に基礎実験と臨床研究をどのように組み合わせるかといった点で大変勉強させて頂きましたが、同時にアメリカと日本の研究の格差も思い知らされました。

帰国後、現在の北大医学部保健学科の前身の医療技術短期大学部に勤めさせて頂きました。ここでは若い学生諸君と出会い、加えて精神科以外の多くの医系の教員、更には医師以外の多くの教員とも親しく交流する事が出来、様々な事を教えていただきました。精神医学を教える楽しさと平行して自分もまた学生から様々な事を教えられました。

実験が困難になりましたので、かねてから興味を抱いていた精神医学と宗教学との関連に関する研究をはじめました。憑き物に関する研究を手始めに、様々な宗教の教団に出入りさせて貰い、人間の心にある宗教心と宗教性の光と影について研究する事が出来ました。北大文学部の宗教学および哲学の講座には素晴らしい先生方がおられ、その門を叩いて教えて頂きました。

それ以降、医学の中でもどちらかと言えばあまり表立たない精神医学の場に立ち、辺縁の領域といわれる精神病理学を手法とし、またひとによってはあやしげと考えられる宗教を対象とするという、医学の辺境ないし異境でずっと研究を進めてきました。

文学部で10年以上に渡って続けさせて頂いた「宗教と精神医学」と題する講義も毎回100～200名の学生を迎え、親しい対話が生まれ、その中から現在もなお共同研究を続けている研究者を迎える事が出来たことも大きな喜びでした。

多くの方々に囲まれ、環境的にも人的にも豊かなこの北海道大学で学び、研究し、教える事が出来た事は本当にありがたい事でした。そしてまたすべてに感謝し去る事が出来る事は何よりも幸せです。

クラークや内村鑑三の作った北大に脈々と波打つ精神は、時代が変わっても受け継がれていくものと信じます。医学部・医学研究科の益々の発展を祈ります。ありがとうございました。

## 連携研究センターシンポジウムを開催して

副研究科長 吉 岡 充 弘

第2回医学研究科連携研究センターシンポジウムがさる2月1日、北海道大学学術交流会館小講堂において開催されました。本連携研究センターは平成18年4月に生命科学研究における堅実な知の探求と飛躍的に未来を切り開く大胆な知の創造を追求する組織体制としてスタートいたしました。これまで、各方面と連携して、広い領域の科学技術の成果を医療や健康維持活動分野におけるイノベーションへ発展させる研究活動の取組を行っております。今回は「医療を取りまく多領域融合研究の展開」というテーマを設定し、各部門からその分野の取組に関する最新の情報提供がなされました。プログラムは以下の通りです。

1. 「生命科学時代の新材料—ソフト&ウェットマテリアルの創成」  
龔劍萍（北海道大学理学研究院教授）
2. 「新規光プローブが拓く生体分子イメージング」  
小澤岳昌（東京大学大学院理学系研究科教授）
3. 「人獣共通感染症流行ウイルス型の鑑別診断：ハantaウイルス感染症を例として」  
有川二郎（北海道大学大学院医学研究科教授）
4. 「遺伝子操作マウスを用いた代謝型グルタミン酸受容体の機能解析」  
饗場 篤（神戸大学大学院医学系研究科教授）
5. 特別講演：「医学物理学への期待と高精度放射線治療装置開発」  
上坂 充（東京大学大学院工学系研究科教授）



本シンポジウムではまず、本間研一連携研究センター長（医学研究科長）から本連携研究センターの概要とこれまでの取組みが示されました。次いで講演に入り、「再生医療・組織工学部門」、「分子・細胞イメージング部門」、「人獣共通感染症診断・治療部門」そして「脳科学部門」からそれぞれのトピックスが提供されました。最後に上坂 充氏（東京大学大学院工学系研究科教授）による「医学物理学への期待と高精度放射線治療装置開発」と題しての特別講演がなされました。参加者にとり、大変有意義な情報が提供され、今後の取組に向けて新たな可能性が示されたシンポジウムとなりました。来年の3月にも第三回のシンポジウムを開催する予定です。

## 「オール北海道先進医学・医療拠点形成シンポジウム」を開催して

TR事業支援室 広報担当 助教 和田 雅子  
(北海道臨床開発機構 TR推進部 広報担当)

道内3医育大学（北大医学研究科、札幌医科大学、旭川医科大学）が協働で実施している大型プロジェクト「オール北海道先進医学医療拠点形成」がスタートして半年が過ぎました。プロジェクトを推進する実施機関「北海道臨床開発機構Hokkaido Organization for Translational Research（以下HTR）」も北大医学研究科内に事務局を構え、やっと本格稼働し、道内外の関係者から注目をいただいているところです。このプロジェクトの半年間の成果と現状報告を含めた「オール北海道先進医学・医療拠点形成シンポジウム」が、2月22日（金）、

京王プラザホテル札幌において開催され、盛況のうちに終了しましたのでご報告します。

当日は開催に先立ち記者会見を行ないました。北海道臨床開発機構長でもある本間研一研究科長を中心に、今井浩三・札幌医科大学長、吉田晃敏・旭川医科大学長、北大病院治験センター長の小池隆夫教授（HTR治験管理部長）、今回のプロジェクトのために製薬企業の創薬開発部門からHTR臨床開発企画・管理担当に着任された永井榮一TR特任教授、そして白土博樹副研究科長（HTR副機構長）が記者会見に臨みました。13社に及ぶ新聞、



テレビ各社のメディア機関からは本事業及び機構について多くの質問が活発に出され、30分に及ぶ会見は無事終了。この会見やシンポジウムの様子は、早速夕方のテレビニュースで放映されたり、翌日後の新聞記事に掲載されました。

13時30分からは4時間にわたってシンポジウムが開催されました。本間機構長、今井学長、吉田学長の挨拶のあと、菱山豊・文部科学省研究振興局ライフサイエンス課長が「オール北海道橋渡し研究への期待」、村上雅義・先端医療振興財団常務理事が「先端医療と橋渡し研究」と題して基調講演を行いました。この間に、白土教授が「北海道臨床開発機構について」と題して、HTRの事業概要を紹介しました。

休憩をはさんで行われた橋渡し研究紹介では、永井教授によるHTRが行う橋渡し研究の概要紹介の後、HTRで支援しているシーズ研究を代表して、安田和則教授（北海道大学）、本望修講師（札幌医科大学）、迫康仁助教（旭川医科大学）から研究発表が行われました。特別講演では、小池教授が座長をされ、大橋靖雄教授（東京大

学大学院医学系研究科生物統計学）による「臨床試験と臨床統計」の講演が行われました。最終的に約250名もの参加者をいただきました。

今回は、発表者の音声とパワーポイントをインターネットでウェブ配信したことも特徴で、研究の成果を広く社会に発信する試みを行い、好評を得ました。

シンポジウム終了後に行われた懇親会では、倉崎高明・文部科学省研究振興局研究振興戦略官、佐伯浩・北海道大学総長、佐藤俊夫・北海道企画振興部長、大和田勲・北海道経済連合会専務理事から祝辞をいただいて会は盛り上がり、成功裏に終了しました。これらの取り組みを、また今後の活動に生かしていきたいと思います。医学部の皆様にも多くのご協力をいただきました。この場をお借りして御礼を申し上げます。

なお、皆様の研究シーズの橋渡しや臨床試験に関してお手伝いできることがありそうでしたら、なんなりと北海道臨床開発機構にご連絡ください（[htr-web@med.hokudaiaic.jp](mailto:htr-web@med.hokudaiaic.jp)）。



シンポジウム会場



北海道臨床開発機構 永井榮一TR特任教授による発表

## 第4回未来創薬・医療イノベーションシンポジウムの報告

核医学分野 教授 玉 木 長 良

### 1. 未来創薬・医療イノベーションシンポジウムとは

平成18年からはじまる第三期科学技術基本計画本研究に基づいて、イノベーションを生み出すシステムの強化がひとつのテーマとして挙げられ、これに基づいて、先端融合領域イノベーション創出拠点形成の公募が開始しました。北海道大学では先端生命科学研究院と塩野義製薬との間で進められている未来創薬と、医学研究科と日立製作所との間で進められている分子イメージングとその応用の2つの研究を融合した形で、“未来創薬・医療イノベーション拠点形成”を申請し、昨年採択されました。こ

の拠点形成は10年間で予定しており、順調にいけば企業と国からの支援をあわせて100億円規模の超大型研究費を集め、研究拠点の整備と産業の育成に寄与することになります。この融合研究を推進するとともに最先端の研究者との交流を深めるため、年に2回未来創薬・医療イノベーションシンポジウムを開催しています。先端生命科学研究院と医学研究科とが交互に担当して立案企画を実施し、情報交換するようにしています。今回は第4回に相当し、先端生命科学研究院に企画していただきました。

## 2. イノベーションシンポジウムに先立って実施した諮問委員会

シンポジウムに先立ち、諮問委員会を開催しました。これは各方面の専門家に諮問委員に就任していただき、諮問委員の先生方や科学技術振興機構（JST）の方々の出席の元で、クローズで研究成果を公表し、ご意見を伺うものです。佐伯北大総長の挨拶の後、五十嵐先端生命科学研究院長および本間医学研究科長よりこれまでの経緯と研究の概要を紹介していただきました。その後成果の発表に入りました。先端生命科学研究院の西村伸一郎先生と塩野義製薬株式会社の武本浩様から未来創薬について発表していただき、その後私と日立製作所の梅垣菊男様から分子イメージングから先端医療についての成果発表を行いました。また以前から宿題をいただいていた創薬と医療の橋渡しについてもインビボでの糖鎖の体内挙動を映像化した最新の内容を公表しました。

その後諮問委員会からご意見をいただきましたが、概して好意的でかつ研究成果を高く評価する内容の発言をいただきました。またJSTからもさらなる発展を期待する旨の発言をいただきました。

## 3. 第4回未来創薬・医療イノベーションシンポジウムの内容

2008年3月14日に第4回シンポジウムを学術交流会館で開催しました。プログラムを図1に示します。講演はすべて英語で実施されました。まず遺伝子制御研究所の畠山正則教授より胃癌とヘリコバクターピロリの関連についての講演をいただきました（図1）。2番目はドイツのRegensburg大学病院のDr. Schmitzよりmonocyte機能を主体としたバイオマーカーの講演をされました。3番目はメルク社のDr. Royより選択的Dipeptidyl peptidase IV (DPP-4) inhibitorを用いた糖尿病治療薬開発についての講演がありました。最後は台湾Academia SinicaのDr. WongよりGlycoproteinやGlycolipidsを用いた創薬研究についての紹介がありました。どの講演も最先端の研究内容であり、活発な議論もありました。参加者は130名に上り、そのうち医学研究科や遺伝子制御研究所からも30名を超える参加者がありました。先端的な創薬の話が中心でしたが、医学研究科にとっても示唆に富む内容であり、創薬研究と医学研究の分野横断的な交流の進んでいることがうかがわれました。その後エンレイソウにてレセプションを行いました。50名を超える参加者があり、くつろいだ雰囲気で見聞交換ができました。

第5回は5月30日に先端生命科学研究院の主催で、第6回は2009年3月13-14日に医学研究科主催でそれぞれ開催予定です。ぜひ多くの方々にご参加いただけることを願っています。



図1：第4回未来創薬・医療イノベーションシンポジウムのポスター。（このポスターで用いている脳の図は日立製作所と共同開発している半導体PETで得られる健常人のブドウ糖代謝の画像。）



図2：第4回未来創薬・医療イノベーションシンポジウムで講演される遺伝子制御研究所の畠山正則教授。



## 医学研究科・医学部医学科

### 「優秀研究賞」「優秀教育賞」「優秀論文賞」「特別賞」について

副研究科長 吉 岡 充 弘

平成17年度に「北海道大学大学院医学研究科・医学部医学科教職員・学生等の顕彰内規」が制定され、今年度は第3回の顕彰となりました。この顕彰は「優秀研究賞」「優秀教育賞」「優秀論文賞」および「特別賞」の4賞からなり、それぞれ顕著な研究業績をあげた専任教職員、顕著な教育業績をあげた専任教職員、特に優れた論文を発表した専任教職員・学生等に、そして国内外において顕著な社会貢献をされた方々に対し授与するものです。この顕彰には、様々な難題を抱えた中での法人化への船出を迎え、活力のある医学研究科発展へのきっかけとすべく思いが込められています。すなわち、医学研究科構成員を元気づけるような活発な活動をされている方々の功績を称えることで、医学研究科を活性化していきたいとするものです。

平成19年度受賞者は、優秀研究賞として白土博樹放射線医学分野教授、優秀論文賞として西江渉皮膚科学分野助教、そして特別賞として和田淳ブリティッシュコロンビア大学医学部神経科学名誉教授に決定いたしました。

#### <優秀研究賞>

白土博樹氏

「動体追跡放射線治療法および

放射線治療の体積効果に係る研究」

白土教授は本学医学部卒（57期）で、2006年4月に北大教授に就任されました。白土教授は放射線治療の本質は「電離現象の4次元空間（時間・空間）における最適な分布」を得ることであると、体内の腫瘍自体の動きを放射線治療中にリアルタイムに把握し、迎撃照射することが可能なX線治療装置「動体追跡放射線治療装置」を国内メーカーと共同開発しました。白土教授を中心とした動体追跡放射線治療に関する論文は数多く、またその引用数の伸びも著しく、2007年にはトムソンサイエンティフィック社からリサーチフロント賞を受賞されています。このように白土教授は放射線治療における基本的な生命現象の解明において時空間的放射線治療の向上が重要であることを追究しただけではなく、自ら開発した技術をシーズとして開発した医療機器を健保採用までに発展させた橋渡し研究も実現しており、この業績は顕著であると言えます。また、「医学物理学」の研究・教育のための寄附講座を立ち上げ、国内随一の医学物理学拠点の構築を推進されています。

今後とも、世界をリードする成果を北大から発信し、さらにその結果を臨床応用に結び付けていただきたいと

願うものです。

#### <優秀論文賞>

西江 渉氏

「Humanization of autoantigen, Nature Medicine 13; 378-383, 2007」

西江氏は1995年に弘前大学医学部を卒業され、2003年から本学大学院医学研究科博士課程（皮膚科学分野）で研究を開始し、2007年本学大学院医学研究科博士課程を修了されています。優秀論文賞の対象となった論文は2007年にNature Medicineに掲載されたもので、「種」の相違を克服した「自己抗原のヒト化」を実現したものです。疾患モデルの開発は病態解明と新規治療法の開発に有用であることは間違いありません。しかし、実験動物とヒトは種が異なるため、疾患を忠実に再現できない場合も多く存在します。自己免疫性水疱症の中でも最も頻度の高い水疱性類天疱瘡もその一つで、表皮真皮境界部に存在するXVII型コラーゲンに対する自己抗体により発症するとされていますが、XVII型コラーゲンの抗原部位アミノ酸配列がヒトとマウス間で大きく異なるため、患者IgGをマウスに投与しても発症しないことが知られています。そこで氏は、マウスXVII型コラーゲン遺伝子をノックアウトし、ヒトXVII型コラーゲン遺伝子を導入し、XVII型コラーゲンをヒト化したマウスを作製しました。このヒト化マウスを用いて水疱性類天疱瘡を再現させ、本抗体を特異的に中和する新規治療法開発を行ったものです。

今後とも、氏の研究が発展することを念願しています。



受賞者を囲んで

## <特別賞>

和田 淳氏

### 「神経学分野における学術的、国際的ならびに社会的貢献」

和田淳氏は北大医学部第22期生で、本学医学部精神医学講座の助教授を経て1954年より、米国ミネソタ大学医学部神経学、神経生理学教室へ留学されました。その後カナダマックギル大学モントリオール神経研究所留学を経て、1956年より、カナダブリティッシュ・コロンビア大学神経科学・神経学助教授、教授を歴任され、1981年から2004年まで同大学病院発作性疾患研究部門の部長を務められました。和田氏は約半世紀にわたりカナダブリティッシュ・コロンビア大において神経学の研究、診療、教育に携わり、学術の発展、医療への奉仕、人材育

成に多大の貢献を成し遂げられ、同大学より名誉博士の学位を授与されております。

和田氏の主な研究領域は臨床てんかん学で、てんかん学者のノーベル賞ともいえるべき「レノックス賞」を受賞されています。その他、枚挙にいとまのないほどの賞を受賞され、氏のこれまでに成し遂げられた数々の偉業が認められた結果と、同窓として誇りに思うものです。

和田氏はカナダと日本の架け橋として文化交流にも尽力され、北方圏文化交流使節団の国際交流活動の支援や、本学出身者のみならず多くの邦人のカナダ・米国への交流に便宜を図ってられました。

氏のご健康を祈念するとともに、今後とも、人材育成および国際交流の促進にご尽力いただけるよう願っています。

## 光イメージング研究連携拠点の形成

医学研究科連携研究センター・先端研究開発部門長 本 間 研 一

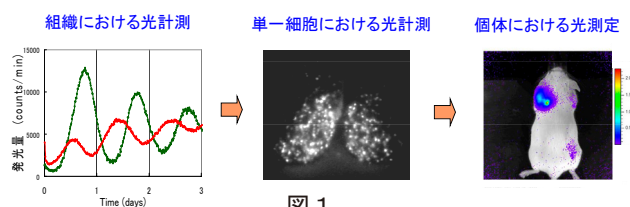
この度、文部科学省・政策課題対応型経費（平成20年度～24年度）により、「光イメージング」に関する連携研究拠点が医学研究科に整備されることになりました。これは、現在急速に進歩している蛍光や発光を用いた光イメージング技術を医学研究科や医療に応用するための研究拠点で、医学研究科が中心となり、先端生命科学研究院と電子科学研究所の3部局で概算要求していた研究課題が採択されたものです。研究拠点は、連携研究センターに新たに設置した「先端研究開発部門」に所属し、医学研究科動物実験施設のオープンラボに設置予定です。拠点には、光イメージングに関する最先端の研究機器を導入し、それらの普及を図るとともに、医学研究や臨床研究への応用のための新しい研究方法論の開発を目指します。プロジェクト終了時には、学内共同利用の研究施設として活用する計画です。

今年度購入予定の機器は、細胞内分子の挙動を高速で追跡できる高速レーザー走査型共焦点蛍光スペクトル顕微鏡と、細胞、組織レベルで長期間にわたって生物発光を連続モニターできる高感度生物発光連続測定装置で、次年度以後は、細胞内の分子間の相互作用を解析できる装置や、さらに個体レベルで機能を可視化する装置などが揃う予定です。すでに進行している「医療イノベーション拠点形成プロジェクト」の半導体PET開発など、RIを用いたイメージング技術を組み合わせることにより、道内はもとより日本でもユニークなイメージング研究の一大拠点が形成されます。

これらの装置を用いた研究の一例をご紹介します。光イメージングが威力を発揮するのは、リアルタイムで長

期間、細胞や組織の活動をモニターできることです。例えば、研究対象である遺伝子のプロモーター下流に発光酵素蛋白（例、ホタルルシフェラーゼ）のcDNAを結合させた人工遺伝子を作成して実験動物や株化細胞に導入し、レポーター・システムを作成します。特定の遺伝子プロモーターが活性化され転写が促進されると、同時に導入した人工遺伝子のプロモーターも活性化されて、発光酵素が産生されます。なんらかの方法で酵素と酵素基質（ルシフェリン）を作用させると、酵素反応の結果発光が生じます。遺伝子転写と発光量との間には一定の相関があるので、発光量を測定することにより、遺伝子の転写の経時変化を発光量の変化で追うことができます。図1に、マウスの視床下部・視交叉上核における時計遺伝子Per1の転写を数日間にわたって記録したものです。時計遺伝子の転写は約24時間周期のリズムを示しますが、その様相が可視化されています。

光イメージング技術はまだ開発途中にあるといっても差し支えなく、それだけに新しい研究領域が創成される可能性のある学問分野で、光イメージング技術を用いた細胞内pHや温度の計測、特定分子の動態解析、さらに異常抗原や癌細胞など同定（標的）、薬物の吸収、分布、代謝、排泄などの体内動態解析、血中分子のin vivoモニターなど、応用範囲は大きく広がっています。





## 医学部創立90周年記念事業基金募金活動の現状 ー第6報ー

医学部創立90周年記念事業実行委員会副委員長 小 山 司

新年度を迎え、皆様におかれましては何かとご多忙の毎日かと存じます。日頃より医学部創立90周年記念事業に、ご理解とご支援をいただき、心より感謝申し上げます。今回より学生のご父母の皆様にも医学部広報をご覧いただくことと、新しく着任された方もいらっしゃるから、改めて本事業について簡単にご説明させていただきます。

北大医学部は、来る2009年（平成21年）に創立90周年を迎えます。この契機に、記念施設「医学部会館フラテ」の建設を柱とするいくつかの記念事業を企画しております。現在医学部には学会やセミナー等を開催する施設や、学生の教育・研究指導に使用する部屋が十分とはいえ、使用している講義室も耐震構造上建て替えを余儀なくされる状況にあります。また、医系大学・部局をめぐる環境が大きく変化していくなかで、北大医学部も新時代に対応すべく、様々な改革を進めています。それらの活動を推進していく上でも、医学教育研究の総司令部となる「医学部会館フラテ」が必要となるのです。こ

の事業の実施に当たりましては、多額の資金が必要となりますことから、2006年9月に90周年記念事業基金を設け、10億円を目標に、教員・同窓会会員・学生のご父母の皆様や関係各界に拠金をお願いしているところです。今年度も引き続き本事業の展開が継続されますので、なお一層のご理解とご協力をお願い致します。

さて、昨年度末までの基金の納入状況は表のとおりとなっています。現医学部教員はもとより同窓会会員の皆様・学生のご父母の皆様、また法人・企業等・関係各方面から、多額のご寄附をいただき、全体額は3億円に近づかんとしています。教員の皆様からの納入率は54.8%にまで達し、全額も4千万円を超えております。しかしながら、目標額10億円までは、依然として遠く及ばない状況であります。

教員の皆様におかれましては、教員の寄附納入率100%達成を悲願として、なお一層のご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。また、ご父母の皆様からのご協力も、重ねてお願い申し上げます。

寄附金納入状況（平成20年3月31日現在）

| 寄附金合計  |                   |      |                       | 296,941,552 円 |
|--------|-------------------|------|-----------------------|---------------|
| ◎教 員   |                   |      | 218 名／ 398 名 (54.8%)  | 40,710,000 円  |
|        | (内訳)              |      |                       |               |
|        | 医学科               | 教員   | 106 名／ 145 名 (73.1%)  | 24,080,000 円  |
|        |                   | 特任教員 | 6 名／ 18 名 (33.3%)     | 450,000 円     |
|        | 病院                | 教員   | 81 名／ 150 名 (54.0%)   | 10,730,000 円  |
|        |                   | 特任教員 | 2 名／ 7 名 (28.6%)      | 300,000 円     |
|        | 保健学科              | 教員   | 23 名／ 78 名 (29.5%)    | 5,150,000 円   |
| ◎分 野   |                   |      | 1 件                   | 1,000,000 円   |
| ◎同門会   | (団体)              |      | 2 件                   | 2,000,000 円   |
| ◎同窓生   | (教員は除く)           |      | 904 名／ 5906 名 (15.3%) | 133,811,667 円 |
| ◎学生の父母 |                   |      | 90 名／ 1413 名 ( 6.4%)  | 10,099,885 円  |
|        | (内訳)              | 医学科  | 71 名／ 609 名 (11.7%)   | 8,569,885 円   |
|        |                   | 保健学科 | 19 名／ 804 名 ( 2.4%)   | 1,530,000 円   |
| ◎大学院生  |                   |      | 1 件                   | 210,000 円     |
| ◎法人等   |                   |      | 115 件                 | 105,610,000 円 |
| ◎篤志家   | (団体・個人 (同門会員を含む)) |      | 15 件                  | 3,500,000 円   |

## 教員寄附者のご芳名

(平成20年3月31日現在 50音順・敬称略)

### 医学研究科

教授 秋田 弘俊、有賀 正、有川 二郎、今村 雅寛、  
岩崎 喜信、岩永 敏彦、近江谷克裕、大野 重昭、  
笠原 正典、神谷 温之、川口 秀明、丸藤 哲、  
岸 玲子、久下 裕司、小池 隆夫、小山 司、  
近藤 哲、櫻井恒太郎、櫻木 範明、佐々木秀直、  
佐々木文章、清水 宏、白土 博樹、瀬谷 司、  
玉木 長良、玉城 英彦、筒井 裕之、寺沢 浩一、  
藤堂 省、西村 正治、野々村克也、畠山 鎮次、  
福島 菊郎、福田 諭、藤田 博美、本間 研一、  
本間 さと、前沢 政次、水上 尚典、三浪 明男、  
三輪 聡一、武蔵 学、森本 裕二、安田 和則、  
山本 有平、吉岡 充弘、渡邊 雅彦  
特任教授 古川 博之、眞島 任史  
准教授 秋山 真志、伊東 学、岩永ひろみ、折館 伸彦、  
神山 俊哉、川村 信明、工藤 正尊、佐々木 了、  
篠原 信雄、田川 義継、武田 宏司、田中 伸哉、  
田中 真樹、傳田 健三、飛驒 一利、平野 聡、  
松本美佐子、森松 組子、矢部 一郎、山田 秀人、  
吉岡 成人  
特任准教授 藤川 恵子  
講師 青山 英史、小谷 善久、高野 廣子、田島 敏広、  
七戸 俊明  
助教 泉 剛、大塚 紀幸、押海 裕之、小野寺 伸、  
志賀 哲、武市 紀人、田中 輝明、棚橋 祐典、  
辻 幸子、富居 一範、中川 伸、西江 渉、  
西出 真也、橋本 聡一、深谷 昌弘、古川 洋志、  
的場光太郎、宮崎 太輔、山崎美和子、築瀬 晴子、  
山口 拓、湯浅 資之、吉田 隆行  
特任助教 秋元 秀俊、權 赫準、鈴木 友己、中西 一彰  
助手 鐘ヶ江香久子、中村 利仁、中村 秀樹、吉岡 英治  
特任助手 橋本 聡子  
退職者 岡本 洋、佐田 文宏、澤村 大輔、末永 直樹、  
高山 千利、柴田 雅彦、古田 康、松本真知子

### 病院

教授 浅香 正博、生駒 一憲、松居 喜郎、松野 吉宏  
准教授 加藤 元嗣、佐藤 直樹、嶋村 剛、菅原 満、  
長 和俊、寺江 聡、遠山 晴一、村下十志文  
講師 阿部理一郎、石川 岳彦、井上 猛、加賀基知三、  
粕野 繁雄、神島 保、久住 一郎、黒田 敏、  
齋藤 伸治、佐々木 聡、澤村 豊、椎谷 紀彦、  
芝木 晃彦、関堂 充、高畑 雅彦、瀧田 恒一、  
陳 進輝、中丸 裕爾、髭 修平、樋田 泰浩、  
本間 明宏、横式 尚司、吉田 和彦  
助教 青柳 哲、安部川智浩、石黒 信久、石森 直樹、  
伊藤 圭、北市 伸義、神津 将仁、齋藤 航、  
沢口 直弘、鈴木 章之、鈴木 清護、高橋 典彦、  
高橋 将人、堤田 新、津布久 崇、寺坂 俊介、  
中村 高士、中山 若樹、南場 研一、新野 正明、  
西 信也、秦 琢磨、原澤 克己、久野健二郎、  
廣瀬 茂樹、三井 貴彦、宮本 正樹、矢野 俊介、  
山田 聡、山田 俊、渡部 琢哉  
特任助教 北市 雄士  
助手 木田 敦知  
医員 伊藤 候輝、賀古 勇輝、栗田 紹子、櫻井高太郎、  
橋本 直樹、増井 拓哉  
退職者 阿部由紀子、夷岡 徳彦、小川 智生、柏村 正明、  
工藤 興亮、國原 孝、小玉 和郎、小山 明彦、  
鈴木 温、長田 陽一、畠山 博充、原林 透、  
本間 次郎、宮坂 和男、森田 研、山中 啓義  
医学部保健学科  
教授 石津 明洋、小林 清一、齋藤 健、酒井 正春、  
大宮司 信、千葉 仁志、西岡 健、八田 達夫、  
福島 順子、松下 通明、松野 一彦、三神 大世、  
宮本 顯二、村田 和香、森下 節子、森山 隆則、  
山本 徹、良村 貞子  
准教授 加藤千恵次、河原田まり子  
退職者 上野 武治、中村仁志夫、武藤眞佐子

(「退職者」は、平成18年9月以降に寄附をした後退職された方)

## お知らせ

### ◆ フラテ祭2008開催について ◆

医学部フラテ祭実行委員会事務局

フラテ祭2008を、9月14日(日)に開催いたします。

フラテ祭は、平素からご支援をいただいております関係各位と医学部の親睦をさらに深め、医学部の現状を見ていただくことにより今後の抱負や課題を認識していただくための場として、昨年9月に第一回目を開催いたしました。

広報第33号でも、開催報告をさせていただきましたが、前回の参加者からは、「しばらく離れていた医学部

の“今”を知ることができた」、「病院巡りツアーでは、普段は見ることのできない設備を間近にみることで、大変興味深かった」、「懐かしい面々と、楽しく時間を過ごすことができた」等、好評の声をいただいております。

前回は札幌在住の方を対象にご招待をさせていただきましたが、今年度は規模を拡大し、全国の同窓生、学生父母、関連企業および医療関係者の皆様方をお招きする

ことといたしました。

北大医学部の変化・革新をお伝えしつつ、肩肘張らない楽しい「祭」となるよう、今から準備を進めております。教職員の皆様にも、ご協力およびご参加をお願いいたします。

日 時：平成20年9月14日（日）13：30～

場 所：北海道大学医学部

#### 第1部 施設・キャンパスツアー 14：00～

##### ●Aコース（医学部施設巡り）

平成16年に竣工した医歯学総合研究棟の実験施設を中心に、最近改築された東北棟・北棟・医学部食堂などの施設をご案内します。

##### ●Bコース（北海道大学病院巡り）

北大病院の外来棟、地下施設（PET、MRI、放射線治療等）、手術室、高度先進医療支援センターなどを中心にご案内します。

##### ●Cコース（キャンパス巡り）

北大構内全体（ポプラ並木、クラーク像、新渡戸稲造像、北キャンパス等）をバスでご案内した後、総

合博物館、古河講堂、交流プラザなどにお立ち寄りいただきます。

#### 第2部 講演会（臨床大講堂）15：30～17：00

##### ●北海道大学医学部長 本間 研一

「飛翔する北大医学部」

##### ●北海道大学病院長 浅香 正博

「北大病院の新たな挑戦」

##### ●北里大学名誉教授 柿田 章

「外から見た我が母校」

#### 第3部 フラタ交歓会（医学部図書館3階）17：30～

##### ●音羽博次奨学基金授与式

##### ●90周年記念事業基金感謝状贈呈式

##### ●挨拶・祝杯

##### ●祝宴（クラシック演奏／医学部DVD上映／北大グッズ抽選会／‘都ぞ弥生’合唱等）

##### ●乾杯

※プログラムの詳細は、変更になる可能性があります。

## ◆ 第27回高桑榮松奨学基金授与式の举行 ◆

北海道大学大学院医学研究科・医学部高桑榮松奨学基金要項に基づく、奨学金及び奨励賞の授与式が去る、2月26日（火）研究科長室において举行されました。被授与者は次のとおりです。

#### 1. 優秀にしてかつ健全な学生に対する奨学金の授与

横 昌 絵 美（医学部6年次：卒業生総代）

#### 2. 優れた業績をあげた研究者に対する奨励賞の授与

北 市 伸 義（眼科助教）

武 市 紀 人（耳鼻咽喉科・頭頸部外科学分野助教）

西 江 渉（皮膚科学分野助教）

#### 3. その他基金の目的にかなう者に対する助成等（外国人留学生・研究者）

タ キンキン（放射線医学分野博士研究員）

## ◆ 第102回 医師国家試験合格状況 ◆

第102回医師国家試験合格者について、去る3月28日（金）厚生労働省から発表されました。

本学部の合格状況は、受験者123人、合格者114人、合格率92.7%でした。新卒・既卒の内訳等は次のとおりです。

今年度の合格率は、新卒は全国平均を上回ったものの、残念ながら既卒は全国平均を下回りましたが、全国医学部80学部中34位の結果となりました。

なお、既卒者で合格した方は、19年3月卒業者9名、15年3月卒業者1名の合計10名でした。

|     | 受験者   | 合格者   | 合格率    | 全国平均合格率 |
|-----|-------|-------|--------|---------|
| 新 卒 | 106 人 | 104 人 | 98.1 % | 92.6%   |
| 既 卒 | 17 人  | 10 人  | 58.8 % | 62.2%   |
| 合 計 | 123 人 | 114 人 | 92.7 % | 90.6%   |



## ◆ 平成20年度 大学院入学状況 ◆

修士課程

| 専攻名 | 定員 | 入学者数 |
|-----|----|------|
| 医科学 | 30 | 30   |

博士課程

| 専攻名 | 定員  | 入学者数   |
|-----|-----|--------|
| 医学  | 100 | 91 (5) |

( ) 内は留学生で内数

## ◆ 平成20年度 医学部入学状況 ◆

平成20年度の北海道大学入学式が去る、4月8日(火)午前10時から札幌コンベンションセンターにおいて、午後2時から医学科入学式が臨床大講堂において挙行されました。

医学科入学式では、はじめに新入生を代表して赤田有

香さんの入学者宣誓があり、引き続き本間医学部長の告辞、浅香北海道大学病院長、長瀬医学部同窓会副会長の祝辞がありました。

医学部の入学者は、医学科95人、保健学科196人の計291人で内訳は次のとおりです。

( ) 内は女子で内数

| 医学科 | 試験区分      | 入学者数 |      | 内 訳    |     |      |     |    |     |
|-----|-----------|------|------|--------|-----|------|-----|----|-----|
|     |           |      |      | 道内高校出身 |     | 左記以外 |     | 現役 |     |
|     | 前期日程      | 80   | (12) | 50     | (5) | 30   | (7) | 17 | (2) |
|     | 後期日程      | 15   | (4)  | 8      | (4) | 7    | (0) | 13 | (4) |
|     | 計         | 95   | (16) | 58     | (9) | 37   | (7) | 30 | (6) |
|     | 【参考：19年度】 | 95   | (11) | 50     | (7) | 45   | (4) | 38 | (8) |

## ◆ 平成19年度 大学院学位授与状況 ◆

|      |         | 学位授与数(課程修了者数) |       |        |       |
|------|---------|---------------|-------|--------|-------|
|      |         | 6月29日         | 9月25日 | 12月25日 | 3月25日 |
| 修士課程 | 医科学     |               |       |        | 27    |
| 博士課程 | 病理系     |               |       |        |       |
|      | 内科系     |               |       |        |       |
|      | 外科系     |               |       | 1      | 1     |
|      | 生体機能学   |               |       | 1      | 5     |
|      | 病態制御学   | 3             | 5     |        | 25    |
|      | 高次診断治療学 | 1             | 2     | 2      | 23    |
|      | 癌医学     | 2             |       | 1      | 6     |
|      | 脳科学     |               | 2(1)  |        | 5     |
|      | 社会医学    |               | 1     |        | 2     |
|      | 計       | 7             | 10    | 4      | 66    |

( ) 内は内数で短縮修了者数

|      | 学位授与数 |       |        |       |
|------|-------|-------|--------|-------|
|      | 6月29日 | 9月25日 | 12月25日 | 3月25日 |
| 論文博士 | 1     | 2     | 2      | 3     |

## ◆ 医学部医学科学士学位記伝達式 ◆

平成20年3月25日（火）午前10時から大学主催の学位記授与式に引き続き、午後1時30分から本学部臨床大講堂において、学士学位記伝達式が挙行されました。

伝達式では、本間医学部長から卒業生一人一人に学位記が手渡され、次いで、本間医学部長の告辞、齋藤医学部同窓会会長の祝辞の後、卒業生を代表して、総代の横畠絵美さんから答辞が読み上げられ、6年間の感謝の意と新たに医師・医学研究者として羽ばたく決意が述べられました。



## ◆ 平成19年度各種助成の採択状況 ◆

単位：円

| 財団法人等                 | 種別           | 氏名      | 交付金       |
|-----------------------|--------------|---------|-----------|
| (財)武田科学振興財団           | 一般研究奨励       | 西 屋 禎   | 2,000,000 |
| (財)伊藤医薬学術交流財団         | 交流助成         | 笠 原 敏 史 | 200,000   |
|                       |              | 齋 藤 亮   | 200,000   |
|                       |              | 武 市 紀 人 | 200,000   |
|                       |              | 田 中 伸 哉 | 200,000   |
|                       |              | 馬 場 謙 吉 | 200,000   |
|                       |              | 松 尾 淳 司 | 200,000   |
|                       |              | 矢 部 一 郎 | 200,000   |
| (財)秋山記念生命科学振興財団       | 招聘助成         | 西 村 正 治 | 300,000   |
|                       | 学会等助成        | 川 口 秀 明 | 300,000   |
|                       | 研究助成金（一般助成）  | 北 村 信 人 | 1,000,000 |
|                       |              | 城 谷 圭 朗 | 1,000,000 |
|                       |              | 田 中 伸 哉 | 1,000,000 |
|                       |              | 渡 辺 雅 彦 | 1,000,000 |
|                       | 研究助成金（奨励助成）  | 西 江 渉   | 500,000   |
|                       |              | 富 居 一 範 | 500,000   |
| (財)加藤記念バイオサイエンス研究振興財団 | 加藤記念国際交流助成   | 西 原 広 史 | 200,000   |
| (財)大川通信基金             | 研究助成         | 横 澤 宏 一 | 1,000,000 |
| (財)三菱財団               | 自然科学研究助成     | 押 海 裕 之 | 3,000,000 |
|                       |              | 島 明 子   | 700,000   |
| (財)武田科学振興財団           | 研究奨励継続助成金    | 小 田 淳   | 1,500,000 |
| ノーステック財団              | 若手研究補助金      | 犬 伏 正 幸 | 399,000   |
|                       |              | 大川原 辰 也 | 400,000   |
|                       |              | 絹 川 真太郎 | 400,000   |
|                       |              | 笹 井 研   | 400,000   |
|                       |              | 西 屋 禎   | 400,000   |
|                       |              | 堀之内 孝 広 | 400,000   |
|                       | 共同研究補助金      | 安 田 和 則 | 1,000,000 |
|                       |              | 山 内 太 郎 | 600,000   |
|                       |              | 吉 永 恵一郎 | 1,000,000 |
|                       | 研究開発シーズ育成補助金 | 近江谷 克 裕 | 2,000,000 |
| (財)持田記念医学薬学振興財団       | 研究助成金        | 押 海 裕 之 | 1,000,000 |
| 先進医薬研究振興財団            | 一般研究助成       | 筒 井 裕 之 | 1,000,000 |
|                       |              | 若 尾 宏   | 1,000,000 |
|                       |              | 畠 山 鎮 次 | 1,000,000 |
|                       | 精神薬療分野一般研究助成 | 小 山 司   | 1,000,000 |

|                 |                         |         |           |
|-----------------|-------------------------|---------|-----------|
| 日本心臓財団          | 研究奨励                    | 絹 川 真太郎 | 2,000,000 |
| 日本応用酵素協会        | 研究助成                    | 絹 川 真太郎 | 300,000   |
| (財)上原記念生命科学財団   | 研究助成(研究助成金)基礎部門         | 矢 部 一 郎 | 5,000,000 |
|                 | 研究助成(研究奨励金)臨床部門         | 絹 川 真太郎 | 2,000,000 |
|                 | 海外留学助成(リサーチフェローシップ)基礎部門 | 深 谷 昌 弘 | 4,000,000 |
|                 | 海外留学助成(リサーチフェローシップ)臨床部門 | 伊 藤 洋 子 | 2,000,000 |
|                 | 研究推進特別奨励金               | 畠 山 鎮 次 | 4,000,000 |
| (財)大阪癌研究会       | 一般学術研究助成                | 笹 井 研   | 500,000   |
| 三菱UFJ信託銀行株式会社   | 公益信託 日本白血病基金助成          | 畠 山 鎮 次 | 500,000   |
| 佐川がん研究助成振興財団    | 平成19年度佐川がん研究助成          | 畠 山 鎮 次 | 1,000,000 |
| (財)日母おぎゃー献金基金   | おぎゃー献金補助金               | 水 上 尚 典 | 2,000,000 |
| (財)黒住医学研究振興財団   | 研究助成                    | 西 原 広 史 | 700,000   |
| 財団法人医療科学研究所     | 研究助成                    | 古 本 尚 樹 | 500,000   |
| 財団法人在宅医療助勇美記念財団 | 在宅医療助成金                 | 古 本 尚 樹 | 1,000,000 |

## 広報室便り5

広報室のメンバーは、昨年に引き続いて白土博樹、近江谷克裕、山本有平、田中真樹、佐藤松吉、鈴木正己の6名です。今年は、いよいよ英語でのHPの作成、大学院生向きのパンフレット作成など、楽しそうな仕事 awaits しております。いろいろ、皆様のご意見をHPに反映してきたいと思っておりますので、HPのことでご提案などありましたら、メールでご連絡ください。メールアドレスはhome-page-office@med.hokudai.ac.jpです。

(白土博樹)

## 編集後記

北国にもようやく春のおとづれを感じるようになりました。長きにわたって教育・研究・診療に情熱をそそがれてきた大野先生、櫻井先生、大宮司先生、岩田先生、本当にお疲れ様でした。先生方のますますのご活躍を祈念しております。私事ですが、医学部保健学科に赴任し4年が経ち、第一期生を送り出しました。4年の間にしっかりと成長し社会に出てゆく様子をみて深い感慨を覚えました。自分が北海道大学を卒業したのがついこの間の様に思いますが、振り返ると20年がたっていました。月日のたつのははやいものです。生命科学の分野の進歩は目覚ましく、本号にも光イメージング技術を用いたin vivoで生体情報の解析が紹介されています。皆様におかれましては、北大のフロンティア精神をもって、新しい分野をどんどん開発していただきたく思います。

(西岡 健)

## Home Pageのご案内

医学研究科／医学部広報は

<http://www.med.hokudai.ac.jp/ko-ho/index.html>

でご覧いただけます。また、ご意見・ご希望などの受け付けメールアドレスは、

[kouhou-office@med.hokudai.ac.jp](mailto:kouhou-office@med.hokudai.ac.jp)

となっております。どうぞご利用ください。

## 北海道大学大学院医学研究科／医学部

発行 北海道大学医学研究科・医学部広報編集委員会  
060-8638 札幌市北区北15条西7丁目

連絡先 医学系事務部総務課庶務担当

電話 011-706-5892

編集委員 近江谷克裕、山本 有平、田中 真樹  
佐藤 松治、西岡 健、平塚 志保